

## 海外進出企業へ国際霊柩搬送士からお伝えしたいこと

海外で亡くなった方と家族にどこまでも寄り添う、その思いとは。

(7月14日開催、「海外安全講演会」から抜粋)

講師

エアハース・インターナショナル株式会社

代表取締役社長 木村利恵 氏

### 正確な情報を早く

海外で亡くなった方のご遺体を迎え、傷んだ体を修復してご遺族の元へ届ける。「国際霊柩送還業」は2003年に当社が日本初の国際霊柩送還業務専門会社として設立した際に商標登録した名称だ。

海外で社員が亡くなったとき、ご遺族とどう向き合うべきか。ご遺族がもどかしい気持ちにならないよう、早く正確に情報を伝えなければならない。どういう状況なのか、これからどうなるのか、ご遺族は一刻も早く知りたい。それなのに「～かもしれない」「～みたいです」と言われたら、何を聞いても「確認します」だったら、悲しみと不安ばかりが募り、怒りに変わるだろう。ご遺族は心の準備のない状態で訃報を受け取る。現地へ迎えに行くかどうか、ご遺体を最終的に運ぶのはどこかなど、要望を聞く。ショックが大きすぎて、現地に行けないご夫人の代わりに、お子さんが行くこともある。そんなご遺族に同行するのも私たちの大事な役目だ。

### 前に進めるように

日本に帰ってくるご遺体は特別貨物として扱われる。通関や検疫のための書類を全て整えておかなければならない。とても煩雑な作業だが、国内外のあらゆる関係先に手を回し、到着する頃には書類審査が終わっている状態にしておく。

日本に帰国後はご遺体の処置。当社が独自に

開発したマイクロバス型と4トントラック型の霊柩処置搬送車の中で行う。ご遺体の傷みが激しいままだと、ご遺族はその姿を頭から消せない。ご遺族を悲しませないためではなく、悲しみに向き合ってもらうためにご遺体をしっかりケアする。悲しむことは、死を受け入れることであり、それができて初めてご遺族は前に進めるようになる。

ご遺族のダメージにどう向き合うか。私には何もできないが、寄り添うことはできる。気が付いたら相手を抱きしめている。仕事ではなく、人として何かしてあげたいと心が動くと、自然に体が動く。

大黒柱を失ったご夫人がいた。夜になると押し寄せてくる言い知れぬ不安。私が何とかしなければ。幼稚園の子どもに言い聞かせるように毎晩電話で彼女に語りかける。何度も何度も悲しみをぶつけてもらって一緒に泣く。3日ぐらいすると「木村さん」と呼んでくれるようになる。「ちゃんと食べた?」「運転気を付けてね」。隣近所のような会話になる。1週間もたてば「りえさん」と。心が軽くなったのだろう、泣き笑いも。立ち直ってくれたのだと思った。

### 仲間たちのおかげ

海外では想定外のことばかり起こる。エアハースの強みは現場を知っていること。世界各国の葬儀社やエンバーミング(遺体の衛生保全処置)を行う専門家など、仲間たちとのネット